

古典との出会い

— 中学1年「竹取物語」の授業から —

金子 直樹

「伝統的な言語文化」が、うるさい。特に「グローバル」がやかましく言われる中であっては、国民としての精神的支柱の形成といった態度・思想的な役割までも期待されているらしい。困ったものである。古典の学習で大切なことは、学習によって何を身につけるのかという固定化した内容ではなく、学習を通して思考や発想をどのように深化・変容させてゆくのかという方法としての面に注目することである。特に導入期の中学生には、そのような古典との出会いを経験させて、古典を学ぶ構えを作らせたい。

1. はじめに

「竹取物語」は、中学1年の国語教科書5社のすべてに採択されている、古典学習への導入教材である。各社の編集方針によって、その扱い方が異なるのは当然であるが、中でも学校図書の「中学校国語1」における扱いは異彩を放っている。単元名こそ「4. 時を超えて」という、一般的に古典分野を連想させるおとなしいものであるが、「言葉の向こうに」という導入文の後に、「姫の物語？ 翁の物語？」という標題のもと、「竹取物語＝かぐや姫の物語」という生徒の「常識」に挑戦する刺激的な内容になっている。

本稿者は、古典を「伝統的な言語文化」という枠組みの中に押し込めてしまうのではなく、今を生きる生徒たちが将来にわたって自己を振り返り、他者との関わりを持ってゆくための学習材としたいと願っている。当校は幸い学校図書の教科書を採択していることもあり、この教科書の挑発に乗って実践を行ってみた。

以下は2014年度当校中学1年生での実践報告である。

2. 単元の概要

①指導時期と時間数

週1時間の授業を「古典」の時間として、1年生の1学期全10時間(週)を充てた。

②展開と指導方法

歴史的仮名遣いに慣れるために音読を重視するのは当然であるが、主には自分の意見・感想を「書く」と、友人の書いた意見・感想を「読む」とを学習活動の中心とした。場面の整理や登場人物の心情などを発問と板書を用いて整理する、いわゆる「読解」は極力行わなかった。生徒に対しては、互いの感想を読み合うことで「みんなで『読み』を確認する」授業だと説明をしたが、指導する側としては、「尖った意見を共有する、他者の鋭い意見を基に自身の意見を更新する」こともねらいとした。

③教材の作成

限られた時間の中でなるべく多くのテキストにふれるため、教科書の体裁に準じて、傍注訳形式で本文プリントを作成した。本文は12Pで大きくうち、右に9Pで全文現代語訳を、左には歴史的仮名遣いを音読する際の注意を加えた。

・構成：本文プリントは、以下の5部構成とした。

その一「冒頭」：「今は昔、竹取の翁といふものありけり」から、「世界のをのこ、あてなるもいやしきも、いかでこのかぐや姫を得てしかな、見てしかなと、音に聞きてめでてまどふ」まで。

その二「貴公子の求婚」：石作皇子の「なほ、この女見では、世にあるまじき心地のしければ」から「かの鉢を捨ててまた言ひけるよりぞ、面なきことをば、『はちを捨て』とは言ひける」までは、その一と同じ体裁で本文プリントとした。倉持皇子から石上鷹足までは、小学館『新編日本古典文学全集』該当部分(P27からP56まで)を、見開きB5版に縮小して配布し、現代語訳の部分だけを読むように指示した。

その三「かぐや姫の嘆き」：「八月十五日ばかりの月に出でて、かぐや姫いたく泣き給ふ」から、「翁、『胸痛きことなたまひそ。うるはしき姿したる使ひにも、さはらじ』と、ねたみをり」まで。

その四「天人来迎」：「かかる程に宵うちすぎて、家の辺り昼の明さにも過ぎて光りわたり」から、「壺の薬そへて、頭中将を呼び寄せて奉らす」まで。

その五「かぐやの姫昇天」：「中将に、天人とりて伝ふ」から、「その煙、いまだ雲の中へたち昇るとぞ、いひ伝へたる」まで。

要するに、内容的には竹取翁の到富譚と、帝の求婚を除き、「竹取物語」全体の3/4に目を通したということになる。本文プリントとして生徒が実際に音読し、原文にあたったのは全体の1/4強である。

・言葉の整理：原文の音読にいくらか慣れてきたその三「かぐや姫の嘆き」以降では、高等学校での古典

学習への橋渡しを意識して、重要な古語や古典語特有の表現などを「言葉の整理」として別プリントにまとめて配布した。具体例は以下のようなもの。

* 「人目も今はつつみ給はず」：「つつむ」は、現代語では「物を囲む、覆う」という意味でしか用いないけれども、古典語では「気持を覆い隠す、遠慮する」という意味で多く用いる。「給はず」の「給ふ」は、その動作をする人（この場合は、「つつまず」という動作をする主語にあたる、かぐや姫）に対する尊敬を表す尊敬語。尊敬語とは、動作をする人に対する尊敬を表す言葉。

* 「うち出で侍りぬるぞ」：「うち出づ」は、「口に出して言う」という意味。「うち出で侍りぬるぞ＝うち明けました」と、もう終わったことのような言い方になっているけれども、これから思い切ってしまうとすることを、古典語ではこんなふうに言う。

これはもちろん覚えさせるためのものではない。ただ、中学生だから古語単語や文法は知らなくてもよいという言い方では、生徒たちにとって不思議な古典語と現代語訳との結びつき方は謎のままになってしまうという問題が生じる。実際に、高等学校での古典学習で現代語訳が苦手な生徒は、一つひとつの言葉に込められた意味をきちんとくみ取ることなく、原文から力任せに「えいっ！」と一気に変換しようとする（できると思い込んでいる）。中学1年では「ふーん、そうなの」程度で構わないし、授業での扱いには慎重さが必要であるが、古典語の表現を読み解いてゆくという姿勢は、早い段階から育てておくのが望ましい。

3. 指導過程 1

－「竹取物語」は本当になじみ深いものか－

学校図書の教科書では、本文冒頭から六文目「それを見れば、三寸ばかりなる人、いとうつくしうてあたり」までを載せた後、『竹取物語』は、粗筋を簡単に説明すると、次のような話です」と受けて、見開きページが替わっている。これが学習活動を意図しての仕掛けなのか、ただ分量的な制約の結果なのかは知らないが、これを利用することにした。最初の授業で、ここまでを音読した後、教科書を閉じさせて、

(1)あなたが知っている「かぐや姫の物語／竹取物語」の「粗筋」を書きなさい。

(2)あなたが知っている「かぐや姫の物語／竹取物語」の「テーマ」を書きなさい。

という課題で、B5版の用紙に書かせた。「テーマ」については、クラス毎に全員の記述を名前入りでプリントに

して、次の時間に配布して読ませた。

学校図書の教科書では、次ページに粗筋として「a 竹取の翁が、根もとの光る竹の中から、三寸ばかりのかわいい女の子を発見し、家に持ち帰って、姪に育てさせました。女の子は三か月もたつ頃になると、とても美しい娘に成長し、かぐや姫と名付けられました。b かぐや姫は五人の貴公子に求婚されますが、それぞれに難題を課して求婚を退け、さらに、帝の求婚も拒んで、c 旧暦八月十五日夜に、月の世界に帰っていく、という物語です。」という文章が、教科書5行分にわたって載っている。[abcは、稿者が便宜的に付した]

生徒が書いた「粗筋」では、ほとんどの生徒が a 「かぐや姫の生い立ち」と、c 「月世界への帰還」については記述していたが、b 「貴公子(帝)の求婚譚」に言及していた者は、3クラスとも数名しかいなかった。

また「テーマ」では、大部分の生徒が d 「別れの悲しさ」や e 「人へのやさしさや感謝することの大切さ」、f 「人間のはかなさ」について記述していた。以下に代表例を2例ずつ紹介する。

d・自分の育てたものが、どこかへ行ってしまうことは、とても悲しいことだということ。

・人と出会うと、必ずいつかお別れの時がやって来るということが言いたかったんだと思います。そして、その人と一緒に過ごした時間が楽しければ楽しいほど、別れは悲しいものだということをお話を読んだと思います。私は、このお話を読んで、少し悲しい物語だなと思いました。別れというものは悲しいなと思いました。

e・育ててもらった人に感謝することで、そこから絆のようなものが新たに生まれてくると思いました。

・おじいさんおばあさんはかぐや姫を守ろうとしているので、人の大切さが感じられる。かぐや姫が、月へ帰る時、おじいさんとおばあさんに感謝の気持ちを伝えたりしているから、感謝を忘れてはいけないと思った。

f・老夫妻の欲しかった子ども(かぐや姫)が月へ帰ってしまったように、自分の欲しいものは簡単には手に入らないということ。

・おじいさんとおばあさんが、かぐや姫を育てるのに夢中になったように、素晴らしい物事というのは、どこからともなく現れ、予測できずに消えてゆくということ。

多くの生徒が、d 登場人物の心情を理解し、e そのような読み取りに対しての評価や価値付けを行い、f そのような話柄から人の世のあり方を教訓として導き出している。

しかし、これらの意見は、決して間違っただけのものではないにせよ、恐らくはテキストに触れることなく、絵本の粗筋や知識から作り出したのであろう、平板なものである。中学生が教訓を好むのは、込み入った状況に絡め取られて身動きならないという経験に乏しく、そのような限られた環境では、物事を単純化して捉える思考法が有効だからである。現実生活だけでは経験のできない、複雑に織りなされた状況下での感情や思考・判断の生成を、テキストに直に触れることで体験させたい。

この、生徒が記述した初発の「テーマ」については、学習のまとめの時点で再度触れる。

4. 指導過程 2

—五人の貴公子の話はなぜあるのか—

①求婚譚を読む(まとめ1)

五人の貴公子の求婚譚では、

「五人の貴公子たちは、

それぞれどのように描かれているのか？

貴公子たちの求婚譚を通して、

『竹取物語』は何を伝えようとしているのか？」

を考えるとという読みの目当てを示し、現代語訳を通読させることで物語の構成への意識を持たせることをねらいとした。一番目の石作皇子の部分は分量的にも短いので、本文プリントを作成して音読をし、和歌についての簡単な説明と、末尾にある語源への言及という「お話の型」を確認するまでを、1時間で扱った。

次の倉持皇子から最後の石上麿足までは、前述の通り現代語訳プリントを用いた。訳だけとはいっても全部で30ページもあるので、1時間では読み終わることができず、残りは家庭で読むことになった。

2時間目には、最初に幾人かに感想を聞いた後で、

(1)あなたが気に入ったもの、おもしろかったものの一つ取り上げ、どこが、どのように気に入ったのか、おもしろかったのかを説明しなさい。

(2)「竹取物語」は貴公子たちの失敗をどのように描いているのか、気づきや感想をまとめなさい。

という課題で、B5版の用紙に書かせた。学年全体から約20名分を選び、名前入りプリントにして、次の時間に配布して全員で読み合わせた。以下はその抜粋である。

(1)【石作皇子】・石作皇子の失敗は倉持皇子の失敗と少し似ているが、石作皇子の失敗の方がお粗末だと思う。私の御石の鉢は光沢があるのに、まっくらにすすのついた鉢を持って来ていた。倉持皇子が全財産を投じて国室的な鍛冶工を六人もやとって蓬萊の玉の枝を作ったのと大違いだと思う。そんな小細工がばれてもさらにかぐや姫を口説いて言い寄ってい

たのがみっともなくってこっけいだった。

【倉持皇子】・偽りの玉の枝を、かぐや姫に自慢して、自分が大変苦勞したとうそをついたものの、蓬萊の玉の枝を作らせた職人に、事実を話されてしまい、あつけなく求婚を断られたところは、心がすっきりした。また、皇子がその後匠をめぐったうちにしたところも、皇子の計算高いところや怖さがでていたと思った。そのエピソードがとてもおもしろかった。

【阿部御主人】・阿部御主人は、何事もお金で解決しようとする、いわば成金のようなものだと思った。阿部御主人が火鼠の皮衣が偽物だと知ったところの情景がありありと浮かび、その間抜けな顔が見えてくるようでおもしろかった。また、皮衣を燃やそうと思うかぐや姫もたいそうかしこい人だと思った。

・和歌を贈った時、ズルがバレていないと思ってとことんキザなセリフを書いていたが、かぐや姫は普通に見破り、阿部御主人がはずかしく思うような和歌を返したところ。その返事を見た時の阿部御主人の顔を想像すると、おもしろい。かぐや姫の気持ちになった時、とても爽快感がある。

【大伴御行】・他の四人は最後まで「かぐや姫を妻に迎えたかった」というようなことが書かれている

(嫌っているわけではない)が、大伴御行は「かぐや姫てふ大盗人の奴」と、全く正反対のことを書かれているのがおもしろかった。最後は笑い話としてまとめられているが、大伴御行が一番現実的な反応をしているのではないかと思う。

【石上麿足】・他の人たちはズルをしてかぐや姫を手に入れようとしているけれど、この人は一生懸命、子安貝を取ろうと思ってがんばっているところがいいなと思った。一生懸命がんばったのに、すぐに死んでしまうところが少し悲しかったけど、とても気に入った。

・かぐや姫が頼んだ実際には存在しないものを真面目に探していたために腰の骨を折ってしまい、それを心配してかぐや姫が文を送っているところがおもしろかった。大事故に発展してしまい、少しあわてているかぐや姫の様子が目に浮かぶ。

(2)・最初に学んだ石作皇子をはじめ、倉持皇子や阿部御主人、大伴御行は、自分の権力や地位があるのいいことに、家来にやらせたり、お金で解決したりして、かぐや姫と結婚しようとして断られたが、一生懸命やろうとした石上麿足に対しては、自分から文を送っている。だからやはり、それなりにやろうとして頑張ったことはちゃんと評価してもらえるのだろうし、悪い考えは見破られ、相手の気持ちを良くように動かすことはできないのだと深く感じた。

正しい行いが人の心を動かせると知った。

・ずるをして持っていったり、大損をしたり、自ら行動をして失敗したりと、失敗するまでの経過はそれぞれ違うが、全てかぐや姫が要求したものを持って行けなかったという点では同じ。文の重要なところは、全て和歌を用いて表現されている。かぐや姫は無理な要求を出すだけでなく、貴公子たちにだまされたり、頭を悩ませたりと、いろいろな思いがこの物語には出てきている。なので、かぐや姫の心境の変化を感じ取りながら物語を読むとおもしろいと思った。また、貴公子たちの失敗ぶりがおもしろかった。

②求婚譚を意味づける(まとめ2)

全員で前記「まとめ1」のプリントを読み、五人の貴公子の人気(不人気)投票をしたり、「劇にするとして誰の役がおもしろそうか」を言い合ったりして、しばらく楽しく遊んだ後、話題を「なぜ五回も失敗譚が書かれているのか、五人の貴公子は皆同じなのか、それぞれ違うのか」という話題に誘導していった。中学1年生らしい「同じ!」「違う!」という声が飛び交う中、

「かぐや姫に求婚する五人の貴公子が、

一人ひとり違うように描かれているのはなぜか?

一人ひとり違うにも関わらず、

失敗してしまうという点では同じように描かれているのはなぜか?」

という課題を出し、B5 半分の用紙に短く書かせた。

結果は、「さまざまな教訓を与えるため」、「変化をつけて、飽きないように、面白くするため」というものが圧倒的に多かったが、それ以外の記述を学年全体から12名分選び、名前入りプリントにして、次の時間に配布して読ませた。以下はその抜粋である。

- ・『竹取物語』は、どんな人でも失敗をおかしてしまうということを伝えたかったのだと思う。石作皇子、倉持皇子のような策略家でうそつきな人、阿部御主人のようなお金持ちの人、大伴御行のような気が強い人、石上躰足のような素直で単純な人というように、どんな人でも失敗すると物語が描かれている。
- ・竹取物語の作者は、人間というもののおろかさ、みにくさを伝えたかったのだと思う。自分の思い通りにするためにずるをしたり、金で解決させようとしたり、大ウソをついたり、人間のおろかで自己中心的な行動を、笑いを交えて書いている。
- ・なぜ作者が五人を違うように書き分けたか? それは、違いを持たせることでどんな人もかぐや姫とはどんな手を使ってでも結婚したかったということを表したかったからだと思う。また、五人の違いを書き分けることで、かぐや姫の結婚したくないという

思いを表していると思う。結末を同じにしたのは、それによってどのような手を使っても結果的には変わらないという、人間の願望のはかなさを表していると思う。

- ・かぐや姫が、成功するはずの無い難題を出したにもかかわらず、五人の貴公子はそれに対して、偽物を作ろうと考えたり、本物を持ってこようと考えたりしていた点や、結果的に五人ともみんな同じ結果に終わることから、人は多様であるが、みんな実際には同じであるということが言いたい。
- ・かぐや姫という美人な妻を手に入れるため、五人はどのようなことをするかを述べている。そして、その五人の行動を示すことによって、人間というものは欲があるとどんな行動をするのかを書いている。そこから、人間のみにくさや性格の違いなどを見ることができ、人生の苦労などが伝わる。

このような意見にまとめたのは学年全体の1/10ほどであるが、次の時間にこの「まとめ2」のプリントを全員で読む時は、前の「まとめ1」時のにぎやかさは正反対に、教室の空気が真剣に澄んでいた。「まとめ1」で求婚譚をしっかりと読み、人物像や行為を具体的につかんでいたからこそ、少ない人数ではあるがこのような整理が可能になり、多くの生徒たちにとってもそれはすぐに響くものになったと思われる。

5. 指導過程3

—かぐや姫はなぜ月に帰るのを嫌がるのか—

①「地上界と月世界との対立」

その三「かぐや姫の嘆き」から、その五「かぐや姫の昇天」までは、前記の通りに明らかになった「竹取物語」の人間観をふまえての読みである。帝の話題を除いただけで話はひとつながりであり、派手な場面でもあるので一気に音読を進めていった。2時間かけてプリント三、四を読んだ後で、

「かぐや姫は、理想世界である月へ帰るのに、なぜ

『いみじからむ心地もせず、悲しくのみなむある』

『さる所へまからむずるもいみじくも侍らず』

と言うのか?」

という課題で、B5 版の用紙に書かせた。

結果は、「天翁や姫のことを忘れてたくないから」、「天人たちは地上のことを『きたなき』と言ったりして失礼だから」というものが圧倒的に多かったが、もう一步詳しく「なぜ、かぐや姫は『忘れてたくない』と思ったのかについて、説明したもの」、「月世界の天人と地上界の人間との違いは、どこにあるのかについて、説明したもの」を学年全体から12名分選び、名前入りプリントにして、

次の時間に配布して読ませた。以下はその抜粋である。

- ・かぐや姫が月世界へ帰るのを嫌がったのは、翁に出会って初めて「本物の愛」を受けたからだと思う。私がそう思った理由は、翁と天人の、かぐや姫に対する言動にある。翁はかぐや姫を拾った時からずっと愛情をたっぷり注いで育て、かぐや姫が月へ帰る時は人目も気にせず泣き伏せている。しかし天人は、娘であるかぐや姫を地上に下らせる時も大して感情的になっているようには思えない。かぐや姫はその愛情の違いに気づいたのだと思う。
- ・かぐや姫が月世界へ帰るのを嫌がっているのは、月世界が嫌いなのではなくて、「人間」というものが好きになったからだと思う。確かに天人は美しく、悩むことも無い、良いことばかりである。その真逆で、人間は、翁のように悩むこともあれば悪いことも起きてしまう。かぐや姫は、そんな完璧な月世界にあきて、刺激のある人間世界に生きている喜びを感じるようになったのだと思う。一度はまってしまった物(事)と、感情が変わる前の別れを「悲しい」と思うのは、かぐや姫も同じであった。だから、月の世界へ帰りたくないと思っているのだと思う。
- ・翁は、かぐや姫を我が子のようにかわいがり、かぐや姫が月に帰ることをとても悲しむ。その姿は、天人のように完璧ではないけれど、かぐや姫のことを大切に思っていることが分かる。かぐや姫は人間の世界に来て、何もかもが完璧である天人よりも、おろかで何一つ思い通りにいかない人間の方が、あたたかい心を持っていることに気がついた。中には欲深い人もいるが、かぐや姫はこの世界に来て初めて悩み、悲しみ、あたたかい心遣いにもふれ、人間の世界がどれだけすばらしいかを知ったから。
- ・この場面では地上の世界の翁、月の世界の天人、地上の人から天(月)の人になる(もどる)かぐや姫という、それぞれ立場の違う三者が登場する。翁は「きたなき所」の人間として描かれている。「きたなき所」の人間はみんなダメであるが、悩むということができる。一方の天人はみな美しく年も取らず悩むこともない。そして地上の人間を操ることもできる。つまりダメなところのない、いわば最強の存在である。そしてその中間の存在であるかぐや姫は、月へ戻る＝天人となる時が迫っている。天人となる時には「心異になる」。つまり翁たちのことを忘れてしまう。かぐや姫が「いみじくも侍らず」と言っているのは、今まで育ててくれた翁たちのことを忘れたくないからだと思う。

②かぐや姫の嘆き

一学期の期末考査で、

「空より落ちぬべき心地す」とあるが、これはかぐや姫のどのような気持ちを表した言葉か、分かりやすく説明せよ。

という出題をした。出題者(稿者)の解答例は、

- ・本来の居場所である悩みのない月世界へ帰らなければならないかぐや姫が、愛情と悲しみとにあふれた地上の人間世界のことも忘れ去ることができずに、両者の間で板挟みになって苦しんでいる心情。であるが、生徒の記述には次のようなものがあった。

○地球から月に行っている時に、あまりに人間世界に戻りたいので、天と地の間で地に落ちてしまうような、後ろ髪を引かれる気持ち。

○天へ帰っても、さみしさや悲しさの気持ちでいっぱい、天と地上との間で宙ぶらりんになってしまうような、やりきれなさを感じている。

○月へ帰らないといけないことは分かっているが、翁たちを置いて帰るのは悲しい。このどっちつかずの状態がもどかしく、そして悲しくもある。

中学1年生としてたいへんに立派である。その四での感想を全員で読み合う際に、「今のかぐや姫は、月世界の者なのか、それとも地上の人間なのか」という疑問が起り、双方にもっともな意見が出た。授業を進めるなかで、結論を出すためではなく、むしろ異論を引き出すためにわざと「多数決を取ろう」ということがあるが、この場面では何度やっても僅差だったり、意見毎に逆転したりという展開となった。その状態からの意見の収束は、そもそも月世界の者か人間かを決めることに無理があり、かぐや姫は両方だから苦しんでいるのではないかということであった。期末試験での答えは、この議論をふまえたものである。

6. まとめ

①読みの変容と、それを支えるもの

1学期の最後にまとめの時間として、

「単元冒頭で書いた『テーマ』を振り返り、自分の読みがどのように深まったのかを明らかにする」

「今だから分かる『竹取物語』のテーマ」

という課題で B5 版の用紙に書かせた。

結果は、以下の通り。ほとんどの生徒がテキストと向き合う中で読みを深めており、内容だけでなく記述の分量も紋切り型の短文ではなく物語の具体をふまえたものになった。

- ・僕は、竹取物語のテーマは「人間」「人間世界のすばらしさ」だと思う。この物語の中で人間や人間世界は「いやしき己」「きたなき所」と天人に言われたり、かぐや姫を妻にしたいがためにウソをついた

りする人間の醜さなどが書かれている。しかし、この世界ならではのよさも書かれている。例えば、思い悩めること、月世界の人よりも人間が優しいこと、全てが完璧ではないこと…。そういった人間のよさがあつたからこそ、完璧なかぐや姫が月世界へ帰ることを喜ばなかったのだと思う。最後の場面で、帝は不老不死の薬を焼いてしまう。これはなぜなのか。おそらく、竹取物語の作者は、終わりがあつたことのよさも伝えなかったのだと思う。完璧ではなくても、天人に見下されても、人生に終わりがあつても、この世界はよい所だと伝えたいのではないだろうか。

- ぼくは、竹取物語については、竹の中から女の子が出てくるくらいのことしか知らなかったのだから、竹取物語を読み進めて行くうちに、始めとは全然違うようなことを考えてゆきました。ぼくは、始めは竹を毎日がんばって取っていると竹の中から女の子が出てきて幸せに暮らすような話かと思っていたので、努力すればよいことがあるのだと思っていました。しかし、読んで行くと五人の貴公子が様々な方法で求婚し、失敗するところから、人間のはかなさを学び、また、天から迎えが来た時に、かぐや姫が嫌がったところから、苦しみや悲しみがあるからこそ、生きがいもあるということを経験することができました。ぼくは、竹取物語を読み終えて、始めとは考えが変わり、この物語は人間の生き方についても一度考えさせてくれる物語なのではないかと思ひます。物語も、読み進めてゆくと多くのことを得られるということがよく分かりました。
- 私は、竹取物語を読み終えて、この物語は単なるファンタジーではなく、「人間の良さ」が描かれていると思ひました。私は、今までこの物語を「大切に育てたのに月に帰らなければいけないなんて、悲しい話だな」としか思つておらず、主題が全く分かっていませんでした。そして竹取物語の学習に入り、五人の貴公子について学んだ時も「どんな手を使つても、誰が挑んでも成功しないなんて話を書いて、筆者は何を伝えたいんだろう」と少し疑問でした。でも、かぐや姫が月に連れ戻されそうになつた時、かぐや姫が月に帰りたくないと言つた理由を考えて、この話が言いたいことが分かりました。それは、人間はみんな欠点を持っていて、何もかも思い通りになることもないが、その時に悲しみや苦しみといった感情を抱くことで、その先にある幸せを喜ぶということだと思ひました。
- 私は最初は「人の大切さ」や「感謝の気持ちを持つ」

と読んでいた。しかしこの物語を読み終え、大きく変わった。それは大きく二つある。まず、貴公子の求婚の場面だ。ここは五人ともそれぞれの方法でやってもできないということを示しているのではなく、「人は十人十色、完璧な人はいない」ということを表していることに気付いた。次に、なぜかぐや姫は月に帰りたくないのかという場面だ。ここは翁や姫を忘れたくないという初歩の考えからさらに一步、「生きることに価値を見出し、おろかで何一つうまくゆかない人間の方が温かい心を持ち、すばらしいことを知つた」という考えへ広げることができた。この竹取物語は深く読んでゆくと様々なことがわかるというのがおもしろい。また、人間と天人との違いにもふれており、人間の愚かさ、欲深さがよく分かつた。よく読むにつれて、こんなに読みが変わるものかと感心した。

- 三ヶ月前、私は竹取物語のテーマについて、「出会いがあれば別れもある」としています。しかし今ではそんな簡単な言葉ではまとめられない、もっと壮大な物語であると思ひています。貴公子たちの求婚がみんな失敗してしまうところは、人間のみにくさがとても際立っています。でも、満月の日の夜が近づくにつれて泣くかぐや姫。そして翁たちとの別れを惜しむかぐや姫。このような場面の様子が一番丁寧に描かれていました。何もかもが完璧である月の人より、みにくい感情もあり、失敗もする地上の人間をかぐや姫が好んだのは、地上の人間に愛着を感じたからだと思ひます。完璧な人には、現在でも少し恐れを感じます。自分を大切に思つてくれて、失敗しながらもがんばる人間の姿を、かぐや姫を通して作者は伝えなかったのだと思ひました。

②古典は「伝統的な言語文化」なのか

古典は、国や地域に特有の風土や思考や発想法の源として、固有の内容や価値を重視するものとして扱うことも、読者がテキストに接する中で既有的発想に変容をもたらす、触媒の働きをするものとして扱うこともできる。主体を古典の側におく前者よりも、生徒自身の発想に力点を置く後の方が、特に導入期においては望ましい。

もちろん、テキストを生徒に差し出す手つきとして、生徒の何を、どのように、どこで発するのかという具体は常に研究しなければならない。今回の実践は、「姫の物語？ 翁の物語？」という教科書に挑発されたものであつたが、翁の影が薄いまま貴公子求婚譚にずれてしまつたのは、稿者が翁を読み切れなかつたからである。

「竹取物語」は解くべき問題の多いテキストである。次回の実践に向けての課題としたい。